
TRIPERIOD

六畳半

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

TRIPERIOD

【Nコード】

N6663F

【作者名】

六畳半

【あらすじ】

一本の電話が、三人の謎めいた運命を解答へいざなう。動き出した時間は、ここに一つの物語を紡ぎ始めた……

Monologue

邂逅とは時に残酷だ

まるで喉元に突き付けられた剣尖のように 鋭く 妖しく 冷たく 光る

それが差し迫っていることさえ認められず 気付けば一筋の滲がまるで汗のように素早く流れていく

乾くことのない 染み入ることもない 消えることさえない —
筋の 滲

それは 例えば柵しがらみに似ている

それは 例えば静寂に似ている

それは ともすれば咎とがに似ている

抗うことも出来ずに ただただ 受け入れるだけ

その果てに 残るものは何一つ無いと知りながら

Scene 1 - Restarted Story -

マーク・ウェイドはその時、デスクの上でのたうつような痛みになされていた。

とあるオフィスビルのワンフロア。無数のデスクが並べられた広い部屋だった。その中を、多くの社員がせわしなく行き交っている。部屋の一番東に一際大きいデスクがあった。天井から吊り下げられた札には厳めしい字体で“部長”と役職名が書かれている。マークはその席で、酷い頭痛に肉付きの良い顔を歪めていた。

こん棒で何度も撲なぐられるかのような激しい痛み。その痛撃は、よく言えばリズムカルにマークを襲う。歳を取ったせいかもしれない、昔に比べて回数も程度も酷くなる頭痛に、マークはいつかの不安を反芻はんそうさせた。

——クソッ、畜生ッ、もうたくさんだ！ やめてくれ！

マークは痛みに耐えるように歯をぎりと食いしばった。額を汗が伝って、はい回るような悪寒に全身が震えた。

「大丈夫ですか？ 部長」

背後から聞き慣れた声がして、マークは急いで振り返った。そこには部下の女性社員が立っていて、心配そうな目で自分を見下ろしている。手にはトレイが乗っていて、どうやらコーヒーを運んでいるらしい。

「……ああ、ありがとう」

マークは彼女が差し出したカップを受け取った。元気の無い声色に彼女は一層顔をしかめた。

「部長。 何だか辛そうですね？」

「大丈夫、心配いらないよ。少し頭痛がしていただけだ」

「そうですね……、頭痛薬でもお持ちしましょうか？」

「いやいや、すぐに治まるだろう。歳を取るとこれだからいかな」

マークは彼女を落ち着かせるためにも、笑顔で言ってみせた。

「そうですか……」

そう言って彼女は、不安そうな顔のまま、他のデスクにコーヒを配り始めた。

「ふう……」

マークは一つ大きく息を吐くと、左手の腕時計を見た。くすんだ時計盤は、5時も半ばを回ったことを示していた。顔を上げると、窓の向こうには小麦色の斜陽がビルの谷間に落ちていくのが見えた。頭の痛みは、機関車が目の前を通り過ぎたように、すうっと抜けてどこかへ遠退いていた。激痛が去った後の奇妙な虚脱感だけが、まるで余韻の様に、頭の中で響いていた。

ふとマークは、側にあった濃紺色の予定帳を手にとって^{づあし}栞の所で開いた。

ページに記された日付と予定を、手でなぞりながら読み進めていくやがて納得したように小さく頷き、マークは予定帳を閉じた。立ち上がって、椅子の背もたれに掛かっていた背広を取って羽織ると、机の上の私物を皮鞆に片付け始めた。それが終わると、すぐ近くにいた直近の部下に、先に失礼する、と断りを入れて足早に部屋を出た。その間、あの女性社員がずっとマークのことを見ていた。不安げな顔だった。

エレベーターで地下まで降り、社員用の駐車場に入る。一般社員でさえ停めることが出来ない重役用の駐車場。殆どは黒塗りの高級送迎車が停められていたが、マークはそれらに見向きもせず、隅にある深緑のセダンに乗った。運転席に座り、エンジンをかける。慣れた手つきで発進させると、開いた自動ドアをくぐって地上に出た。フロントガラス越しの空は、一層その明度を落として、街に夜の訪れを告げていた。車のテールライト、明滅する信号機、光輝くシヨウウィンドウとネオンサイン。降り始めた夜の帳と反比例して、街はけばけばしく色付いていた。

マークは目抜き通りを少し走ったあと、横路地に逸れた。いくつか交通量の少ない道を選びながらしばらく走ると、繁華街を離れた

のか、背の低い建物が増えてきた。そのまま郊外を走り、住宅街に入る。様々な風体ふうていの住宅の間を素早く走り抜け、ようやくマークは緑の屋根が特徴的な自宅にたどり着いた。

既に駐車している別のセダンに気を配りながら、マークは手際よく車を車庫に入れた。荷物を持って庭に入り、玄関から中に入る。

「ただいま……」

トーンの低い声でそう言うと、マークはリビングに入った。扉が開く音に、夕飯の支度をしていた女性が顔を上げる。

「あらあなた。帰ったのね」

そう言ってそこにいた彼女は優しく笑んだ。

「ポーラ。それじゃあまるで帰って欲しくなかったみたいに聞こえるぞ」

ポーラの笑みに気を良くしたのか、マークは冗談めかして言った。「それは心外ね、愛する夫の為に集中して夕飯を作っていたら、当人が帰って来たのに気付かなかったただけだわ」

そう言いながらポーラは、ゆっくりとマークに近付いた。マークとは違って細身で碧い瞳だった。長い金髪は今は結わいて留められている。

マークは目の前の鮮やかな碧眼を見つめ、やがて愛おしそうにその目を細めた。

「ただいま。そして愛しているよ、ポーラ」

「お帰りなさい。私もよ、マーク」

そうして、二人は僅かな時間、お互いの唇を重ね合わせた。

居間の電話が鳴ったのは、陽も落ちて久しい午後9時の事だった。二階の書斎で小説を読み耽っていたマークは、階下で呼出し音が鳴っているのを聞いて顔を上げた。

耳を澄まして聞いていると、数回鳴った呼出し音が不自然な所で途切れた。ポーラが受話器を取ったのだろう。判然としないくもった会話が聞こえ、それが止むと、ポーラが階段を登る足音が聞こえた。

マークは小説に筆を挟み、机に置いた。立ち上がって、部屋を後にする。出てすぐの廊下で、階段を登り切ったポーラと鉢合わせた。「電話よ。アレックスさんから」

「アレックスから？ …… そうか。そういえば、今日こつちに戻る予定だったな」

独り言のように呟くと、マークはポーラを避けて階段を降りた。居間に入り、電話機の置かれているチェストの前に行く。外されたままの受話器を取った。

「アレックスか？ マークだ」

敬語を使う仲でもないのに、マークは気軽に話しかけた。
『代わってもらってすまん。視察は滞りなく終わったよ。今空港に着いた所だ。中々有意義な出張だった』

男性にしては少し高い声。耳障りの良い、澄んだ声だった。

「そうか、それは何よりだ。ご苦労さん」

『それでな、それとは別件なんだが、…… 今から会えないか？』

アレックスが突然声をひそめた。マークは不信に思っ眉を潜める。

「今から？ どうして……？」

『電話越しじゃ話づらいんだ。カトラスで待ってるから、今すぐ来てくれ』

アレックスは二人でよく行く居酒屋の名前を出した。

「おいおい待ってくれ、用件くらい言ってもいいだろう?」

『頼む、会って話させてくれ。それに、絶対に後悔はさせない』

そう言うアレックスの声は少々上擦っていて、どこか嬉しそうな、そんな風に聞こえた。

「……わかった。20分後にはそっちに着くように努力する」

マークはそれだけ言うと、一方的に電話を切った。溜息をついておもむろに顔を上げると、そこには不安げな表情を浮かべているポーラが立っていた。

「アレックスの奴、どうしたんだ? 突然話が有るって……。もしかして、転職の相談かな?」

マークはおどけた声で言った。が、ポーラの顔は曇ったままだった。

「何処に行くの?」

「カトラスだよ。すまんが先に寝ていてくれ、12時を回る事はないから心配しないでほしい」

「わかったわ」

そう言つて、ポーラはクローゼットの中から上着を取り出し、マークに手渡した。

「ありがとう。じゃあ、行ってくる」

「気をつけて」

いつも通りの挨拶を交わして、マークは外に出た。室内の暖を背に、四月上旬の肌寒い夜風が身を包む。遠く西に、月明かりに照らされる山脈の尾根が見えた。

マークは上着のポケットから車のキーを取り出すと、さっき乗っていたセダンの扉を開けて、車内に入った。エンジンをかけ、しばらく暖気させた後、発進した。

住宅から聞こえる歓談の声を掻き消すように、車はエンジン音を唸らせて、再び都心の喧騒の中へと舞い戻っていく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6663f/>

TRIPERIOD

2010年10月21日23時07分発行